

「蟬と蟻」考

——落穂拾いのように——

大 場 恒 明

クレッソン女史の対日批判は痛烈だった。フランス史上初の女性首相は、日本人を「黄色いチビども」と罵倒し、「世界征服をもくろむ働く蟻だ」とこき下ろした。「働き蜂」と呼ばなかったところがみそである。フランス人なら誰もが、日本「蟻」に対するフランス「蟬」という構図を、彼女の発言からすぐさま連想したはずだ。

言うまでもなく、イソップの寓話、より正確には、一七世紀の詩人ラ・フォンテーヌの『寓話詩』（一六六八—一六九四）の冒頭を飾る「蟬と蟻」（*La Cigale et la Fourmi*）の一篇である。全国の小学生が暗唱させられる、いわば国定教材の一つだ。うらぶれた蟬の懇願をにべもなく拒絶する冷酷な蟻の嘲笑をフランス人の耳によみがえらせ、屈辱感をあおり、沈滞したフランス経済に活を入れようという前首相の遠謀が透けて見える。ひごろ、バッシングの風圧を前に、ひたすら耐えの姿勢だった日本外務省もさすがに堪りかねたか、エヌキン駐日大使を呼び嚴重抗議し、右翼団体はフランス大使館前

でクレッソン人形の首をはねた。あの時、メリメの一文をもじって、*Eh ! madame, ne nous amusez pas à ferrer les cigales.*（首相、つまらぬことを言い合って時間を浪費するのはよろしゅうよ）とでも応じたら、日本の株も少しあがったかもしれないのに。

前置きがつい長くなったが、ここで日仏経済摩擦というような生々しいことを論ずるつもりはないし、その資格もない。「蟬と蟻」にこめられた「人生の真実」にせまろうなどという高邁な意図もさらさらない。この寓話の話柄とはおよそ不似合いな、浮き世ばなれした詮索であれこれ書き並べてみようとするだけである。

—

まずは、ラ・フォンテーヌの「蟬と蟻」の翻訳から。ここは先達の名訳をそっくり引用させてもらおうのがいいばんいいのだが、無謀は承知のうえで、あえて拙訳をこ

ころみよう。もちろん、詩を訳して詩へ至ることなど能力の及ぶところではないから、訳詩というより、ほとんど、悪ふざけである。

へひと夏を歌いくらしたそのあげく、北風吹いてくるころは、セミのふところ無一文、蠅もみみずも絶えてた。▽

原詩では、登場人物（と言っておこう）「蟬」を冒頭に置いて *La cigale*、・・・とうたい出しますインパクトを与える。ところで、蟬は女性名詞だから、この登場人物は女性として扱われている。はて、雌の蟬は鳴かないはずだが、などといらぬ難癖をつけるのは野暮というものだ。蟬は、文法上、女性なのだから仕方がない。こういう寓話では、名詞が性をもつのはフランス語のなきどころかもしれない。しかし、どっちみち擬人化されシンボライズされた存在だから、文法上の性と蟬の性別の生物学的特性を結びつけて云々してはミューズが怒るだろう。とにかく、ここで「蟬」に鳴いてもわからないことには話が成り立たない。せめてこの「蟬」は *la cigale mâle*（雄の蟬）なのだということにおいて先に進む。

へすき腹かかえ是非もなく、隣りのアリに泣きついて、春が来るまで食いつなぐ、穀物などを借りたいと、

さても哀れな頼みよう。セミが言うには、「取り入れ前に、元利そろえてお返し申す、紳士の誓い破るまい」▽

もう一人の人物「蟻」*la Fourmi* も女性である。もう先と同じ詮索はひかえよう。さらに、群棲する蟻が単数なのはおかしいではないか、などとクレームをつけるのもやめておく。文学的単純化という一言で一蹴されてしまうだろうから。それにしても、樹上生活者（少なくとも羽化後）の「蟬」が地上（中）生活者の「蟻」と隣人関係にあるのは、先と同工異曲の愚問とはいえ、なにかひっかかるものがないわけではない。それに、夏のさかりの短期間を命のかぎり鳴きつくして生を全うし越冬しない蟬が、「来年の春まで穀物を貸してくれ」と頼みこむのも変だと言えないことはない。もっとも、冷酷無慚な「蟻」が拒絶したために、「蟬」は越冬できずにおそらく死ぬ運命にあるのだろうから、この話柄を生物学的特性の一種の由来譚のようなものとして深読みすればいいのかもしれないが、言うまでもなく、この寓話のテーマはそこにはない。もう一つ、「蟬」は、穀物が実るころ裕福になるようなのだが、樹液を食性とする蟬と穀物、さらには蠅やみみずとどう結びつく

のか。やはり疑問は残る。

へ他人に貸すなどともない、そんな不徳はアリには無縁、依頼の主に聞きただす、「暑い季節は何していたの」、「はばかりながら、夜昼とわず、人を選ばず誰にでも、歌を聞かせてくらしつつ」、「歌を聞かせてくらしていたと、それは結構、恭悦至極、それでは今度は踊ってみたら」

蟬が夜昼とわず鳴き続けるというのは、どうだろう。それに、蟬が「踊る」、という動作もイメージがどうも鮮明に浮かばない。それとも、これは「歌う」と「踊る」を対にした蟻の底意地悪いレトリックとして納得しておけばいいのだろうか。あるいは、このダンスは「死の踊り」なのか。され歌のような訳で名詩を台なしにしたうえに、あれこれと妙なところにこだわったから、原詩をかかげ、そのつぐないとし、詩聖に怒りを鎮めてもらおう。

LA CIGALE ET LA FOURMI

La Cigale, ayant chanté
Tout l'été,
Se trouva fort dépourvue
Quand la bise fut venue :

Pas un seul petit morceau
De mouche ou de vermisseau.
Elle alla crier famine
Chez la Fourmi sa voisine,
La priant de lui prêter
Quelque grain pour subsister
Jusqu'à la saison nouvelle.
《 Je vous paierai, lui dit-elle,
Avant l'ôû, foi d'animal,
Intérêt et principal. 》
La Fourmi n'est pas prêteuse :
C'est là son moindre défaut.
《 Que faisiez-vous au temps chaud ?
Dit-elle à cette emprunteuse.
-- Nuit et jour à tout venant
Je chantois, ne vous déplaîse.
-- Vous chantiez ? j'en suis fort aise :
Eh bien ! dansez maintenant. 》

La Fontaine (1621-1695) : *Fables*

話は、フランソワーズ・サガンの『悲しみよこんにちは』（一九五四年）にとぶ。一八才の彼女の華々しいデビュー作である。この小説の中につぎのような一節がある。

「私たちはまだ七月の初めに入ったところで、星は動かなかった。テラスの砂利の上で蟬が鳴いていた。きつと何千匹もいるのだろう。暑さと月に酔って幾

夜も幾夜もよびてこのようにおかしな声で鳴くのは・蟬はただ一方の翅鞘をもう一方の翅鞘にすりつけるものと聞かされていたけれども、私はそれが発情期の猫の声のように、本能的な喉から出る歌だと信じたかった。（新潮文庫）」

場所は南フランス、カンヌ近郊の別荘。蟬（les cigales）が夜つびでテラスの砂利の上で、翅鞘をこすりつけて鳴いているのだ。だとすると、この cigale が「蟬」でないことは明らかだ。フランス語の cigale は、われわれになじみの深い、いわゆる「蟬」ではないのか、と言うとそうではない。いささかややっこしいが、たしかに、cigale は、日本に棲息するのと同種の半翅目の蟬を意味する。ただし、この蟬は南フランスの一部にしかない。種類も日本ほど多くはなく、概して小柄で、ツツツツツと鳴く。

こういうわけで、緯度で言えば日本の北海道以北

に位置するフランスでは、cigale というワードはあっても、その実物を見る機会は多くない。人の往来がきわめて限られていた時代にはなおさらである。必然的にと言おうか、語義の混淆が生じる。ラテン語の cicada を語源とする cigale は、実際には sauterelle と混同されて使われている。sauterelle は「はったいなご」であるが、この語は本来「跳びはねるもの」を意味するところから、さらに、形態的または生態的に似ているほかの昆虫、たとえば、「こころぎ」や「きりぎりす」などにも誤用されるようになった。

だから、ラ・フォンテーヌの「蟬と蟻」の cigale は、（サガンの小説にしてもそうだが）いわゆる「蟬」ではなく、grande sauterelle verte であろう。つまり「大型の緑のばった」というわけだが、「きりぎりす」の一種であろうか。この寓話詩の主が蟬ではなく、きりぎりすだとすれば、話はかなり辻褄があってくる。

そういえば、日本では、このイソップ寓話が「ありとぎりぎりす」という題で子供に親しまれてきたはずだ。

周知のように、日本に初めてこの寓話が伝えられたのは、一五九三年（文禄二年）、口語訳ローマ字本の『エソポのファブラス』による。少なくとも現存するものとしては、ヨーロッパ文芸の最初の邦訳である。ブリティッシュ・ライブラリーにただ一冊所蔵されるこの天下の

稀覯本については多言を要しないだろう。勉強社文庫三『天草版伊曽保物語』によって現物の複写を見ることができ、それを国字に移した角川文庫『キリシタン版エソポ物語』もある。研究は、新村出氏を先達として限なく行なわれてきたし、最近では、小堀桂一郎氏が『イソップ寓話』（中公新書五二三、昭和五三年）の中で「伝承と変容」を詳細に考証されている。

『エソポのファブラス』の訳では「蟬と、蟻との事」であり、同系統の慶長元和年間の国字本『伊曽保物語』（一七世紀初頭）でも「蟻と蟬の事」となっていて、どちらも「蟬」系統であるが、明治以降の英語版から翻訳されたものは「きりぎりす」系統というように、伝承経路の違いによって、はっきり二つの系統に分かれている。

「蟬」から「きりぎりす」への変容は、蟬の棲息北限を境にして生じていることは確かであり、したがって、もっぱら生物分布の観点から説明されている。それは間違いないとしても、ことは必ずしもそれほど単純ではないのではないか、という疑問が実は小文を綴る動機なのである。

三

イソップという人物ははたして実在したのか。この議

論は昔から繰り返されている。紀元前五世紀にヘロドトスが『歴史』の中で、紀元前六世紀ごろの解放奴隷である「寓話作家アイソpos」について書き残していることが実在説の一つの根拠になっている。ソクラテスやプラトンの話には譬喩が多いし、古代ギリシヤ人はもともと寓話ずきだったらしいから、イソップ作として伝えられている寓話の中には、作者不明の民間伝承的な寓話も数多くまじっているはずである。極端なことを言えば、当時ギリシヤで広く語り伝えられていた気のきいた寓話を集めて、それをひっくり返して「イソップ寓話」と銘うったとも考えられる。紀元前からイソップの「伝記」なるものが書かれていたようだが、「イソップ伝」として定着したのは、一四世紀のビザンチンの修道士プラヌデスが編纂して、寓話集の前に付けたことに始まる。ラ・フォンテーヌの『寓話詩』にも『エソポのファブラス』にも、その「イソップ伝」が巻頭に置かれている。しかし、それは一休小僧や彦一の「とんち話」に類するもので、伝記としての信憑性はもともときわめて薄い。いずれにせよ、イソップ寓話が編纂されたことが重要なのであって、イソップその人の実在性について云々するのはあまり意味があるとは思えない。らんぼうな言い方だが、紀元前六世紀ごろイソップ風寓話を語るのがうまいアイソposという名前のイソップ風の男がいた、というよう

なところが実態ではなからうか。

さて、「蟬と蟻」の寓話に話を限定するとして、この寓話の祖形ないしはそれに近い話はどういうものだったのか。おびただしい版本、系統本が錯綜している中で、系統を遡ることも、祖形を特定するのもほとんど不可能に近い難事である。それに、比較の入手しやすい流布本の数は限られているから、手もとにある数種類の資料をもとに、「葦の髄から天井を覗く」ような、学術的考証からはほど遠い憶測をあれこれめぐらしてみるはかばかしい。

定説によれば、大きな系統として二つあって、その一つは通称「アウグスターナ系統本」と呼ばれるもの、もう一つは「シュタインヘーヴェル系統本」である。

まず、アウグスターナの方は、古代ギリシャで語り伝えられていたイソップ寓話の原型に可能な限り近い形を残しているとみなされているもの。アウグスブルグで発見されたギリシャ語稿本をもとにした一連の諸本である。この系統のうち手もとにあるのは「シャンブリー版」と松下仁治氏が「ハウスラート版」を底本にして翻訳した『イソップ物語』（けいざい春秋社、昭和五〇年）の二つ。「シャンブリー版」はエミール・シャンブリーが校訂しギリシャ語原文と仏訳を対称させたものである。

シャンブリー版の仏訳からできるだけ逐語的に重訳す

ると、まずタイトルは「蟬と蟻」だが「蟻」は複数形である。

へ夏のことだった。蟻たちは穀物が湿ってしまったので、乾かしていた。腹を空かした一匹の蟬が彼女らに食物を求めた。蟻たちは彼女に言った。「どうして夏の間にあんたも食糧を貯えて置かなかったのさ。」——「その暇がなかったの」と蟬は答えた。「美しい調べで歌っていたので。」蟻たちは彼女をせせら笑った。「なるほど」と彼女らは言った。「夏に歌っていたのなら、冬には踊りなさいよ。」この寓話は何事においても、苦しみと危険を避けたいと思うなら、怠慢を慎まねばならないということを教えている。へ松下訳では、タイトルが「蟻と蟬」と逆になっている。へオリュンポスの下は、寒くて冬であった。併し、蟻は収獲の時期に、沢山の食物を集めて、自分の家に積んでいた。すると、飢えた蟬が、飢えと大変な寒さに耐えながら、穴の中に這入って来て、息をしていた。それだから、蟬は、自分も小麦をいくらか食べて、救われるために、蟻の食物を恵んで貰わなければならなかった。併し、蟻は蟬に向かって言った。「夏は何処にいたんだ。どうして、収獲の時期に、食物を集めなかったのだ。」すると、蟬は言った。「俺は歌を歌っていて旅人達を喜ばせていたんだ。」

そこで、蟻は彼を大変笑って、言った。「それじゃあ、冬には踊るんだね。」この譬え話は、必要な暮らしを考えて、娯楽や神々の像の行列に気を奪われない事程、良いものはない事を、我々に教える。ンシャンブリー版と比べると、話の展開に多少粉飾が目立つことを除けば大した異同はない。ギリシヤ語では、*Terré* (蟬) も *μούγκος* (蟻の複数) も男性だから、蟬と蟻の会話はすべて男言葉で表されている。ラ・フォンテーヌの拙訳のところでこだわった蟬と蟻の性別と、蟻の複数の問題はギリシヤ語原話では解決する。いわゆる「教訓」が後置されていること以外は、ラ・フォンテーヌの話柄との大きな異同はない。

四

つぎにシュタインヘーヴェル系統本。ウルムのドイツ人医師ハインリッヒ・シュタインヘーヴェル (Heinrich Steinhöwel) が一四七〇年代に、中世から一五世紀までに流布していた各種のイソップ寓話集を集大成し、ラ独対訳本を刊行した。もともと庶民の生活の中から生まれたイソップ寓話を、当時の日常ドイツ語訳を通じて、知識階級の占有言語であるラテン語の軀から解き放ち、民衆に開放したわけで、これはまさに文化史上画期的な

事業だった。その背景には印刷術の発達という強力な援護もあった。

この初版本は、一八七三年シュトゥットガルトの文芸協会が古典文学叢書として出版した Hermann Osterley 編纂による翻刻版 *Steinhöwels Äsop* によって内容を知ることができる。

初版本刊行の直後、ドイツ語訳の部分だけを独立させたものが、アウグスブルグで一四七八年から一四八〇年まで計三回出版され、これには木版画が付けられた。

たちまち、シュタインヘーヴェル本を底本とした各国語の翻訳が続出し、そのため、シュタインヘーヴェル本は近代ヨーロッパにおけるイソップ寓話普及の源泉となった。

シュタインヘーヴェル本刊行直後の一四八〇年に、リヨンの聖職者ジュリアン・マシヨール (Julien Macho) のフランス語訳が出た。これも木版画入りであるが、シュタインヘーヴェル本の木版画をトレースして忠実に覆刻したものである。そのために、マシヨール本の木版画は原画との見分けがほとんどつけにくいほどの出来ばえであるが、原画の左右を取り違えて刻んでもあるものもあって、制作過程がしのばれる。

この仏訳マシヨール本を底本にして、一四八四年には、イギリスで、ウィリアム・カクストン (William Caxton)

の英訳が出る。これにもマシヨール本の体裁になつた木版画が付けられている。カクストン本は、英語圏の近・現代イソップ寓話の源泉となつた。

マシヨール本の完全覆刻版は残念ながら手に入らない。

ただ、一九二六年に、マシヨール本の木版画の覆刻と収録寓話のリストに梗概をつけたものが、リヨンの Association Guillaume Le Roy Lyon から刊行されて、*(Claude Dalbanne : Les Subtils Fables d'Esoppe, Notice par J. Bastin)*、これによって少なくとも木版画を見ることができただけでも幸いとしなければならぬ。それにカクストン本がかなり忠実なマシヨール本の翻訳だということだし、一九六七年にハーヴァード大学出版会から出版された翻刻版では R・J・Lenaghan によるマシヨール本との照合が行なわれているので、さしあたりは、これによってマシヨール訳を推定するはかばかはない。

シュタインヘーヴェル本からラテン語本文が切り離されて、三〇年たらずの間に一五〇種以上のラテン語諸版が刊行されたと言われている。このうちのひとつがイエズス会の宣教師か、あるいは、天正遣欧少年使節一行によって日本にもたらされ、一五九三年（文禄二年）『エソポのファブラス』としてローマ字訳され、さらに、慶長元和年間に国字本『伊曾保物語』として翻訳されること

になる。つまり、フランスでラ・フォンテーヌが『寓話詩』を完成する百年も前に、日本庶民は宣教師から、イソップ寓話を聞かされていたわけである。

はじめに『エソポのファブラス』から「蟬と、蟻との事」を引用する。

へある冬の半に、蟻どもあまた穴より五穀を出いて、日にさらし、風に吹かするを、蟬が来て、これをもらうた。蟻の云ふは、「御辺は過ぎた夏・秋は、何事を営まれたぞ?」。蟬の云ふは、「夏と秋の間には、吟曲にとり紛れて、少しも暇を得なんだによって、何たる営みもせなんだ」と云ふ。蟻、「げにげにその分ぢや。夏・秋歌ひ遊ばれたごとく、今も秘曲を尽されてよからうず」とて、散々に嘲り、少しの食を取らせて戻した。下心。人は力の尽きぬ中に、未来の勤めをすることが肝要ぢや。少しの力と暇ある時、慰みを事とせう者は、必ず後に難を受けいではかなふまい。」

『エソポのファブラス』は安土桃山時代末期の民衆の口語を記録に残し、芥川龍之介の『奉教人の死』や『きりしとほろ上人伝』に特異な文体を提供したことでも、その文化史的な価値がきわめて高い資料であるが、こゝで取りあげている寓話「蟬と蟻」に関して言えば、それまで、ギリシャ語やラテン語で伝えられてきた「蟬と蟻」

の寓話に、『エソポのファブラス』はおそらく歴史上はじめて重要な変容をくわえた。ここでは、蟻は蟬を散々嘲笑しながらも、少し食物を恵んで帰すのである。明らかにキリスト教理念を反映した修正補筆である。西欧的な自助の精神が当時の日本庶民には強烈すぎて受け入れがたいものだと考えた翻訳者（おそらく宣教師といわれる日本人イルマンの共同作業だったと思われるが不明）の配慮だったに違いない。はからずも、後世一八世紀にジャン・ジャック・ルソーが『エミール』（一七六二年）の中で、ラ・フォンテーヌの「蟬と蟻」が子供の教育に有害であると難じた告発を先取りして、それにキリスト教的な愛他精神と日本的な温情で答えた格好になった。ちなみにルソーは次のように書いている。「子どもは好んで蟻を見ならうことになる。人は他人に頭を下げることがを好まない。子どもはいつも輝かしい役割りを演じようとする。それは自尊心からくる選択で、ごく自然な選択だ。ところで、これは子どもにたいしてなんとという恐ろしい教訓だろう。あらゆる怪物のなかでもっともいとわしい怪物は、けちんぼで情けしらずの子ども、他人が自分になにをもとめているかを知りながらそれを拒絶するような子どもだ。蟻はもっとひどいことをする。蟻は拒絶したうえに相手をあざわらうことを子どもに教えているのだ。（今野一雄訳）」明治以降の教科書や童話に収

められた「蟬（きりぎりす）と蟻」は、いずれも温情的な結末になっているのは周知の通りだ。

『エソポのファブラス』と同一系統の底本から翻訳されたと思われる慶長元和本『伊曾保物語』では、この変容は行なわれていないから、このいわゆる「キリシタン版」の独自性がいっそう目立つのである。『伊曾保物語』では、次のようになっている。

へ去ほどこに、春過、夏たけ、秋も深くて、冬の頃にもなりしかば、日のうらうら成時、蟻穴よりはひ出、餌食を干しなどす。蟬来たりて蟻と申は、「あないみじの蟻殿や、かゝる冬ざれまで左様に豊かに餌食を持たせ玉ふ物かな。我に少の餌食をたび給へ」と申ければ、蟻答云、「御辺は春秋の営みには何事をかし玉ひけるぞ」といへば、蟬答云、「夏秋身の営みとては、木末にこたふばかりなり。其音曲に取乱し、ひまなきまゝに暮し候」といへば、蟻申けるは、「今とてもなど歌ひ給はぬぞ。謡長じては終に舞とこそ承れ。いやしき餌食を求めて、何にかはし玉ふべき」とて穴に入ぬ。其ごとく、人の世にも有事も我力に及ばん程は、たしかに世の事をも営むべし。豊か成時つゞまやかにせざる人は、貧しうして後悔ゆる也。盛ん成時学せざれば、老て後悔ゆる物也。酔いのうちに乱れぬれば、覚ての後悔ゆる物也。〽

原文のラテン語 *cicada* は日本では「蟬」と訳されてまったく支障はなかった。しかし蟬のいないドイツではそうはいかなかった。そのことには後でふれることにして、『エソポのフアブラス』と『伊曾保物語』の底本となったラテン語本の「蟬と蟻」がどういう形だったかを推定させてくれるシュタインヘーヴェル版のラテン語本文を試訳してみよう。

「一七番蟻と蟬の寓話」というタイトルだが、一七番というのは、シュタインヘーヴェル本第二部を成すイソップ寓話集（ロムルス集）第四巻の中の収録番号である。へ冬の晴れた日に、蟻が、夏に集めて纏めておいた小麦の粒を、穴から引き出していた。一方、腹を空かしていた蟬は、生きのびるために何か食べる物を与えてくれるよう蟻のところに頼みに行った。蟻は彼女に言った。「夏には何をしていたの。彼女の方は言った。「私には暇がなかったの、始終あちこち駆けまわって歌っていたので。」蟻は嘲笑って、穀物をしまいながら、言った。「夏に歌っていたのなら、冬には踊りなさいよ。」この寓話は、恵まれている時にしっかりと働くように、さもないと、今日のものにも事欠くようになって、ひとに物を頼んでも手に入らないということを教え、怠慢を戒めている。ラテン語の *cicada*, *formica* (蟻) はフランス語と

同じく、どちらも女性で、蟻は単数。構成は「教訓後置」の型であり、これが『イソポのフアブラス』には、「下心」として、『伊曾保物語』には「其ごとく」という形で引き継がれている。

五

ラテン語原文を訳したシュタインヘーヴェルの「新高ドイツ語」は、名詞の語頭が小文字で表記されているほか、正字法が現代ドイツ語とかなり違うものの、基本的には共通の文法体系にもとづいて書かれているようである。いくつかの書き換えはあるが、全体的にはラテン語原文のほぼ忠実な翻訳と言えそうである。教訓の部分は、へ仕事をすべき時に働くことを好まない者は、もしたまたまその必要が生じて、誰も助けに來てはくれない」となっていて、怠惰を戒めている趣意は共通であると言つてよからう。

ところで、ラテン語原文「蟬と蟻」のドイツ語対訳では、タイトルが *Die xvii. fabel von der amais und dem grillen* となり、「蟬」から *Grille* (こうろぎ) への転換が行なわれた。このシュタインヘーヴェルのドイツ語訳が源流となり、蟬が棲息しない国での翻訳に、「きりぎりす」の系統が形成されていくことにな



(図1) シュタインヘーヴェル本

Za. xvi. fable est de la forme et de la figure.



(図2) マジョー本

るのだが、この変容の源はシュタインヘーヴェル本のドイツ語訳文と木版画とのくいちがいにあった。つまり、ドイツ語訳は *Grille* なのだが、木版画に描かれているのは、どう見ても「こうろぎ」ではなく、*Grasshopper* であり、フランス語の *sauterelle* なのである(図1)。木版画家とシュタインヘーヴェルとの間の連携がうまくいっていないかったのであろうか。それはともかく、このヴィジュアル情報の威力によって、蟬から *Grasshopper* への変容が定着することになったとすれば、シュタインヘーヴェル本の木版画こそ、本当の意味での変容の現場だったと言わなければならないだろう。

シュタインヘーヴェルの意図は、イソップ物語を民衆

のものにすることにあったから、ラテン語原文の寓意を分かりやすく提示するために、機械的に言葉と言葉置き換えるのではなく、意味から意味へ翻訳するという方法をとっている。そういうわけで、「蟬と蟻」の寓話に關しては、おおかたのドイツ人になじみのない蟬では具合が悪かったのであろう。

さて、シュタインヘーヴェル本を底本にして仏訳したマジョーは聖職者だったから、ローマとの往復が多かったはずで、もちろん、蟬の実物は知っていたに違いないが、マジョー本の木版画でも蟬が *sauterelle* として描かれている(図2)のは、原画をそのままトレースしたためであらう。あるいは、フランス人には *sauterelle* の方がむしろ分かりやすいという判断があったのかもしれない。いずれにせよ、フランス語の *cigale* が *sauterelle* と混同して使われるようになったのは、あるいはこの辺がそもその始まりだったのではなからうか。かりにそうだとしたら、ラ・フォンテーヌの詩は、マジョー本の木版画から生まれたと言えなくもないが、もちろん、それは牽強附会というものである。

カクストン本は仏訳を通した重訳のせいか、シュタインヘーヴェル本とのずれが指摘されたり、訳文が稚拙だと批判されたりするが、たしかに正字法の不統一が目立つという不備はあるようだ。カクストンの初版本の現物

覆刻版が、一九七二年アムステルダムで出版され (*The English Experience* No. 439, published in 1972 by Theatrstrum Orbis Terrarvm Ltd.)、これによつてカクストンの木版画も見ることが出来る。カクストンの木版画は、マシヨー本木版画のフリーハンド・コピーであり、シュタイン・ハーヴェル本、マシヨー本の原画に比べると、荒削りで質が落ちるように思われる。前述したハーヴェードの翻刻版から、「蟬と蟻」のカクストンによる翻訳を引用してみよう。

The xvii fable is of the Ant and of the sygale

It is good to putneye hym self in the somer season of suche thynges/wherof he shalle myster and haue nede in wynter season/As thou mayst see by this present fable/ Of the sygalle/whiche in the wynter tyme went and demanded of the ant somme of her Corne for to ete/And thenne the Ant sayd to the sygall/what hast thou done al the somer last passed/And the sygalle answered/ I haue songe/ And after sayd the ante to her/ Of my corne shalt not thou none haue/ And yf thou hast songe alle the somer/daunse now in wynter/ And therfore there is one tyme

for to doo some labour and werk/ And one tyme for to haue rest/ For he that werketh not ne doth no good/ shal haue ofte at his teeth grete cold and lacke at his nede/

構成上の目立った特徴は、冒頭でまず寓話の趣旨を明らかにし、末尾でもう一度、へだから・・・と寓意を説明していることだ。シュタイン・ハーヴェル本の「教訓後置」の型をそのまま踏襲せずに、教訓部分を前後に二分して、「教訓前置」と「教訓後置」を併用する形をとっている。これは、もともとマシヨー本がそうになっていたためだろう。冒頭でへ冬に必要なような物を夏に調達しておくのは有益なことだ」と前置きして寓話が始まり、しめくくりはへこういうわけで、何か仕事をするにしろ休息をとるにしろ潮時というものがある。そのわけは、働きもせず、有益なこともしない者は、えてして、ひもじい思いをし、必要な物にもこと欠くようになるからだ」となっていて、教訓の主旨はシュタイン・ハーヴェル本と大差ない。

肝心の「蟬」は sygale (sygalle, sygall と綴り字が安定しない) となっている。これはマシヨー本がシュタイン・ハーヴェル本の grille をとらずに、ラテン原文の cicada を cigale (Sigialle という綴りになっている

The 28th fable is of the Unl and of the Regals



It is good to purpise hym self in the soner season of
such thynges; to beate in to thair mynde any tyme ar
in Wpnter season/ I do thus myself for the yere persent
sible / O the pgarde whiche in the Wpnter tyme beate any
remembrance of the ante comynge of the Corne for to be / I do
thence the I do nat saye by the pgarde / what tyme shall we be at the
soner last passyng / I am by the pgarde slyghtly / I do songs /
I do any other sayd the ante to be / O I me mynt I do nat thou
not hys / I do by the best tyme alle the soner / I do nat
in Wpnter / I do any thyng for there is one tyme for to do some
laboure anyt Wpnter / anyt one tyme for to be tyme wyl / I do
wylketh it is not doo no good / I do tyme of at the tyme gryn
anyt anyt tyme at the tyme

(図3) カクストーン本

るようだが）と訳し、カクストンがさらに *cigale* をそのまま、*sygale* に置き換えたということだろう。門外漢が単なる憶測で言うのはおこがましいが、当時の英語に *sygale* というワードはなかったのではなからうか。この昆虫の姿を知ることになったのではなからうか。カクストン本の読者は、この寓話に添えられた木版画からこの昆虫の姿を知ることになったのではなからうか。カクストンにも、木版画に語らせようという気持ちがあつたのかもしれない。ところが、木版画に描かれているのは明らかに蟬ではなく、イギリス人にもなじみの深い *grasshopper*（はった、いなご、きりぎりす）なのである（図3）。こうしてカクストン系統のイソップ寓話



(図4) ジェイコブス版

では蟬がGrasshopper にとって代わられることになる。たとえば、カクストンの現代版ともいふべき、一八九四年のジョウゼフ・ジェイコブスの『イソップ寓話集』(*The Fables of* *soop*, selected, told anew and their history traced by Joseph Jacobs; done into pictures by Richard Heighway, London Macmillan & Co., Ltd, First Edition 1894, Reprinted 1901) ではタイトルが The Ant & the Grasshopper となり、挿絵もよりリアルになっている(図4)。参考までに全文を引用しておく。

(図4) ジェイコブス版

food for the winter," said the Ant, "and recommend you to do the same." "Why bother about winter?" said the Grasshopper; "we have got plenty of food at present." But the Ant went on its way and continued its toil. When the winter came the Grasshopper had no food, and found itself dying of hunger, while it saw the ants distributing every day corn and grain from the stores they had collected in the summer. Then the Grasshopper knew

It is best to prepare for the days of necessity.

シュタインヘーヴェル本の訳文と木版画のずれは、寓話集の前に置かれている「イソップの生涯」の中のエピソードの部分でも起こっている。イソップがある国王の怒りをかい殺されそうになったさい、命乞いをするために語る寓話で、その内容はこうである。ある人が「いなか」を取りに出かけ、蟬を見つけたので、これを捕まえ殺そうとする。蟬は、穀物にも人にも害を与えず木の上でただ無心に鳴いているだけなのにどうして私を殺すのかと嘆く。イソップは国王に私もこの蟬のようなものです、と訴え許される。この部分のラテン語原文では、

locustas (じなう) と cicada となっているのに (『イソポのフアブラス』でもラ・フォンテーヌでも同じ)、ドイツ語訳では「いなう」が、なんと vogel (vogel) 「鳥」に変わり、cicada が grille となり、木版画 (図5) では grasshopper として描かれている。ラテン語では locustas と cicada の有害無害という対比関係は明確だが、ドイツ語訳ではこの対比関係が混乱している。木版画で grille を grasshopper としてしまっているのも、対比関係を作るのに苦慮したシュタインヘーヴェルは仕方なく「鳥」としたのだろうか。昆虫の生物分布に起因する混乱がこんなところにも表れている。カクストン本では、さらに変容して、「蠅」を追いかけ



(図5) シュタインヘーヴェル本



(図6) カクストン本

ていた男が「ナイチンゲール」を捕まえるという話に変わっている。ただし、木版画では grasshopper が描かれていることはシュタインヘーヴェル本と同じである(図6)。マッシュー本では Lengouste (いなか) と蟬になっているが、木版画にはやはり蟬が grasshopper として描かれている。捕まえるという話に変わっている。ただし、木版画では grasshopper が描かれていることはシュタインヘーヴェル本と同じである(図6)。マッシュー本では Lengo-
nste (いなか) と蟬になっているが、木版画にはやはり蟬が grasshopper として描かれている。

六

ギリシャ語の *Térris* が、「蟬」のほかに grasshopper などをも包括する多義性をもっているのではないかと、最初はひそかに考えていたのだが、どうやら当てがはずれて、「蟬」以外の意味はなさそうである。ただ、ラ・フォンテーヌの「蟬と蟻」に登場する cigale こと、実は grande saute-elle verte が、ラテン名を tetti-gonia viridissima といい、ギリシャ語の *lóounek* と同一語根をもっていて、これは「濃緑の蟬のようなもの」というほどの意味だから、「蟬」と「きりぎりす」はも

ともと名称のレベルでもあながち無縁ではないわけだ。このことも、今まで見てきたような「蟬」から「きりぎりす」への変容をごく自然に促す一因になっているのではなからうか。

ギリシャでは古代から蟬は象徴的な存在だったようだ。たとえば、アテナイ人はその土地に生まれ育ったことを誇示するために、地中から生まれる蟬を型どった黄金の髪飾りをつけたと言われる。そのほか、美しい鳴き音によって、蟬は音楽の象徴でもあった。イソップ寓話の編纂者ファエドルスが伝えるプラトンの譬話につきのようなものがある。「ミューズが生まれる前、蟬は人間だった。ミューズが誕生し音楽が出現すると、人間たちは楽しみに耽り歌い続け、食べることも飲むこともすっかり忘れはて死に至るほどだった。蟬は彼らの生まれかわりであり、生まれた時から食をとらず、死ぬまで飲まず食わず歌い続けるという天恵をミューズから受けているのである。」そのほか、よく知られたイソップ寓話の一つに「ろばと蟬」というのがあって、これは、「蟬の鳴き音を聞いたろばが、その美しい声を羨み、何を食べたらそのような声になるのかと尋ねると、蟬は露を食べるのだと答えたので、ろばは露のほかは何も口にせず餓死してしまった」という話になっている。蟬が何も食わず、命と引き替えに美しい歌を歌い続け死に至る(「ろばと

蟻」では飢え死にするのはろばだが）これらの寓話は、「蟬と蟻」の寓話と同根であり、一種の生物由来譚である。

秋も深まったある日、生を終えた一匹の蟬が地上に落ち、その死骸を蟻たちが巣穴に運んでいる。これを目にしたギリシヤ人には、まるで蟬が空腹のあまり蟻たちに物乞いをしているように見えたのであろう。生物由来譚に、怠惰の戒めや勤労の勧めといった教訓話が結びついていった背景には、おそらくギリシヤ社会の成熟過程があるのだろう。「蟬と蟻」の寓話に、日夜饗宴にうつつをぬかしていた貴族たちと、農民や奴隷たちの怨念や世俗の知恵という対比構図を重ねてみるのは、深読みにすぎだろうか。